星さんちの

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星さんちの

【Ｎコード】
Ｎ１８９９Ｈ

【作者名】
みゆ貴茂

【あらすじ】
この作品は星家に残された三兄弟の平凡かつバカバカしい日常をゆるゆると綴った小説と呼ぶのもおこがましい代物です。過度の期待などせず、慈悲の心を持ちつつも、どうでもいい投げ遣りな気持ちで読むことをお薦めします。

一年前――――。
突如、父・辰也のニュ―ヨ―クへの転勤が決まった。
ついてきてほしいと言う辰也に対し、次男・希卯（きぼう）は、
「日本語が通じるなら行ってもいいぜ」
と、のんきそうに言った。
残念ながらニュ―ヨ―クで日本語は通じない。
三男・平午（へいご）は、
「かったるい故、遠慮いたします」
と、読書に夢中で目もくれずに言った。
長男・光子（こうし）は、
「二人を置いていくわけにはいかないから、父さん一人で行ってね」
と申し訳なさそうに言った。
結局、父・辰也（たつや）は泣きながらニュ―ヨ―クへ旅立った。

星さんちの

星家／長男
星光子（ホシコウシ）　十六歳　高校二年生
Ｏ型　蟹座　身長１７２ｃｍ　体重６０ｋｇ
趣味／特技　料理・洗濯・掃除
星兄弟、最後の良心・眼鏡が栄えるおっとり主婦高校生

星家／次男
星希卯（ホシキボウ）　十四歳　中学二年生
Ｂ型　牡羊座　身長１６４ｃｍ　体重６２ｋｇ
趣味／特技　空手・ロードワーク
『俺の拳が怒りで唸る！！』・熱血空手バカ次男、ぼうちゃん

星家／三男
星平午（ホシヘイゴ）　十歳　小学五年生
Ａ型　乙女座　身長１３９ｃｍ　体重２８ｋｇ
趣味／特技　読書・人間監察
見た目は天使・心は悪魔、可愛さ余って、全身真っ黒

この作品は星家に残された三兄弟の平凡かつバカバカしい日常をゆるゆると綴った小説と呼ぶのもおこがましい代物です。
過度の期待などせず、慈悲の心を持ちつつも、どうでもいい投げ遣りな気持ちで読むことをお薦めします。

ふつうの日

「ただいまぁ」
夕方、買物袋をひっさげた光子が学校から帰宅する。
「おかえりなさい、光子兄さま」
リビングで読書していた平午が光子に挨拶をした。ちなみに平午が読んでいる本は『バカを上手に掌で踊らせる方法』である。
「またそんな本読んで……」
呆れる光子。
「掌で踊らせるなんてよくないことだよ、平午」
「誤解しないでください、光子兄さま」
軽く注意しようとする光子に、平午は左手をすっと突出しそれを制する。
「私とてそんなことは百も承知です。しかしお笑いを極めるためにはありとあらゆる知識が必要なのです」
「えぇっ！！平午、コメディアンになりたいの！？」
喫驚する光子。平午がお笑い芸人を目指すなど、これまでの彼の言動からは想像しがたい。
「いいえ」
平午は静かに首を振り言い切る。
「バカな芸人を上手に転がす名物アナウンサーにでもなろうかと思いまして」
「あっそ」
呆れる光子。
また、妙なニッチを……。この間は『ペット自慢をしてくる飼い主を鼻で笑い飛ばすトリマー』になりたいなどと言っていた。
「そういえばぼうは？今日は空手ない日だよね」
ぼうこと次男・希卯は空手道場に通っているが、今日は休みでもう学校から帰っていてもいい時間である。
「あいつなら走ってくると言ってでていきましたよ。有り余っている体力を有意義に使えないバカですから」
「あはは……まぁそこがぼうのいいところだよ。それより今日はオ

ムレツにしようと思うけどいい？」
光子は冷蔵庫に買ってきた食材を入れながら訊ねる。
「いいのですが……」
「あれ？卵まだ一パックあったはずなんだけど……」
冷蔵庫の中を覗いても見つからない。
「それなのですが、あのバカが生のままジョッキで一気飲みしてましたよ」
「えぇ！？また？あれだけ飲むならプロテインで我慢しなさいって言ってるのに。だいたい飲むんなら運動後じゃないのかなぁ」
「バカですから、あいつは」
文句を垂れる光子に平午が本に目を落としたまま告げた。
「ちょっと卵買ってくるからお留守番たのむね」
「はい。いってらっしゃいませ」
光子は慌ててスーパーに卵を買いにでかけて行った。
数分後。
「たっだいまぁ」
胴着姿の希卯が帰ってきた。
「あれ？光子兄まだ帰ってねぇのか？」
「ふん。どっかのバカが卵の一気飲みなんぞするから、慌てて買いに行かれたんだよ、バカ」
平午は本に目を落としたまま希卯を罵る。
「げぇ！怒ってた？」
「まぁな。プロテインで我慢しろとおっしゃってたぞ」
「う～みゅ」
希卯は腕を組み難しい顔をする。
「わかっちゃいるんだけどな。たまぁに飲みたい衝動にかられて我慢できなくなるんだよなぁ。生卵ジョッキ」
「欲望が制御できないのはおつむの弱いしょうこだ」
「なにおぅ！！」
口の減らない平午に希卯は飛び掛かる。

「うわっ！」
「それ、ぱふぱふ攻撃だ！」
「己れ！汗臭い胸板をくっつけるな！！」
もみ合いになる希卯と平午。
「ぎゃっはっはっはっ！汗は男のオ―デコロンだぜ！！」
「なにが男のオ―デコロンだ！？そんなだから、お前の携帯のアドレスに一件も女の名前がないのだっ！！」
「ぎくっ！！」
希卯は驚き平午から離れて身構える。
「なぜそのことを知っている？さてはお前、人の携帯いじくりやがったな？」
「ほう？」
焦る希卯に平午が嘲笑を向ける。
「鎌をかけただけだったが、よもや本当だとは。呆れるのを通り越して、もはや天然記念物に登録して保護せねばならんな」
「うぐぅ……そういうお前はどうなんだ、ぇえっ！？」
「ふん、見るがいい」
平午は自分の携帯電話を希卯に投げる。希卯が恐る恐るアドレスを開いてみると、
「うっ」
『あい・かな・まい・みさと・よう子・ゆき、ｅｔｃ……』あるは、あるは女の名前。
「ざっと六十人か？」
「うぐ」
希卯は自分の携帯電話を取出し、アドレスを開いて突き出す。
「俺だって〃あい〃は載ってるぞ」
「だからお前はバカなのだ」
やれやれと首を振る平午。
「それは私たち行きつけの美容院の名前だろが。しかも店主は油ののりきった四十代のオッサンだ」

「くっくそぉ」
希卯は泣きながら風呂場に走っていった。
「女なんか空手家には必要ねぇんだよ！」
「ふっ愚かな」
数分後。
「ただいまぁ」
卵を買って光子が帰ってきた。
「ぼう帰ってきた？」
「ええ。泣きながらシャワー浴びてますよ」
「泣きながら？なんで？」
光子が首を傾げると、
「光子兄っ！」
希卯が真っ裸で風呂場からでてきた。
「パンツぐらいはきなよ、ぼう」
光子は少しだけ頬を紅潮させ注意する。
がっしりと引き締まった筋肉、大人と子供の境目にある下半身が妙に艶かし。
「んな、こたぁどうでもいい。光子兄の携帯のアドレスには女の名前入ってるのか？」
「えっ！？女の？」
「痴れ者がっ！光子兄さまのような知的かつ可憐で高貴なお方が女友達の百人や千人いて当然だろうがっ！？そうですよね、光子兄さま？」
怒鳴る平午。光子は首を傾げながら、
「どうだったかなぁ」
と自分の携帯電話弄くった。
「おっ！あった」
「ほら見ろっ！？」
なぜか平午が得意げになる。
「でも、一つだけだったよ」

「なんだ一つだけじゃん」
「うぐ。光子兄さまは硬派なお方だ。そのお一方を大切になされているに違いない」
自分と大差ないと呆れる希卯。平午は顔を引きつらせながらいいわけがましく言う。
「ほら」
光子は満面の笑みで自分の携帯電話を突き出した。
「〃あい〃ちゃん」

☆星さんちの★

私立鉄大学付属高等学校。都内でも有数の進学率を誇る男子校である。
キーンコーンカーンコーン
「起立、礼」
今日も当然のように訪れる放課後。
「くっ」
誰もが授業の窮屈から解放され至福を噛み締める瞬間だが、ことジングウノリト神宮紀人にとって試練のときであった。
「あっあのっ！！」
神宮はそそくさと帰ろうとしていた星光子を呼び止める。
「神宮くんどうかした？」
振り向いた光子は気さくな笑みを神宮に向けた。
「かっ」
可愛い！！
神宮は頬を紅潮させ言葉を詰まらせる。
神宮紀人、牡牛座のB型。そう、彼は星光子に片思いをしていた。
十六歳、遅咲きの春である。

「ん？」
ぽかんとなって、首を傾げる光子。眼鏡が少しだけずり下がる。
こういう隙だらけの顔は、好意を持つものにとって、もろ心の臓にクリティカルヒットする。
「……」
うおぉぉぉぉ抱き締めてぇ。
神宮の脳味噌は完全に沸騰していた。
「おっオレっ……」
星くんのことが好きだっ！！
喉の先まで出かかっている言葉が、臆病と言う名の鋲に引っ掛かって出てこない。
「？」
「オレ、その――――」
「おい、神宮部活行くぞ」
神宮は野球部所属である。同じ野球部のクラスメイト、飯田に急かされる。
くっここまでか！？
「おっオレ、野球やってんだ」
「うん、知ってるよ……」
光子は苦笑いを浮かべて頷いた。
「そっそうか。しっ知ってるよな。ナハハ」
「あはははは」
「そっそれじゃあオレ、部活あるから気をつけて帰れよ」
神宮は居たたまれない気持ちになってさっさと教室を出ようとする。
「あっ神宮くん」
光子は慌てて神宮を呼び止める。神宮はびくっとなって振り返る。
「部活がんばってね」
「あっああ」
神宮はにやついてガッツポーズをしてから廊下に飛び出た。

「あっ待てよ」
その後を慌てて追う飯田。
「なぁ神宮。なんでお前、星に毎日野球やってるって念押ししてんだ？」
「そっそれは……」
神宮は同じことを昨日も一昨日も、そのまた昨日も光子に告げていた。
「じっジンクスなんだ」
「はぁ？」
「毎日、星に同じこと告げると腕が上がるっていう」
「なんだそりゃ」
神宮の苦しいいいわけに眉を顰める飯田。
それを見て神宮は、
「お前って不細工だな」
としみじみ言った。
星と比べたら月と提灯アンコウだ。
「なんだよ、いきなり」
「いや、別に」
否、これは飯田せいばかりではない。
つい今し方、あんなに愛らしいものを目にしたのだ。どんな人間だって下に見えてしまうのは致し方ない。
ぅああ、星っ！！この溢るる情愛をどうすればきみに伝えることができるんだ！？
「なに一人で悶えてんだよ？」
飯田は歩きながら横で忙しく悶絶している神宮に問う。
「ふっ。心に青春と言う名の青あざがあるからだ」
「ふ～ん。あっそうそう、青あざと言えばお前聞いた？」
「あん？」
「ほら、去年の冬、田上先輩が顔にでっけぇ青あざ作ってたじゃん？ずっと理由わかんなかったけど、こないだ新島キャプテンに聞い

てさ。キャプテンが言うには、冬至の日に柚子湯に入ろうとしたけど、柚子がなくって、代わりになぜか田上先輩、風呂にポン酢入れて父親にぶん殴られたって。『オレたちは鍋の具かぁ！！』って言って」

「風呂にポン酢……田上先輩が風呂にポン酢……タガミフロポンズ――――っ！そうだ！！」

飯田の話をほぼ聞き流していた神宮が突如大声を張り上げる。

「そうだ、鹿児島へ行こう！！」

「はぁ？」

「じゃない、〝手紙でプロポーズ〟だっ！」

拳を突き上げる神宮。

これならいける。

文字、それは人類が産んだ最初で最後の大発明。

この滾る思いを文章にしたためれば、いやがうえにも星に俺の思いが伝わるはず、オウイエィ！

「わりぃ、飯田。オレ、今日部活休むってキャプテンに言っといて」

「えっちょっと」

「うおぉぉぉぉぉぉ」

神宮は絶叫して廊下を突っ走っていった。

「なんなんだ？一体……」

ドテバタズタ

「痛ぇ！」

あっ神宮、階段からすっころんだ。

☆星さんちの★

次の日の放課後。

「くっくっく」

この手紙さえ星に届けば俺の青春は一気にバラ色に変わるはずだ。
決意を胸に学校を飛び出してきた神宮は、程なくして普通の一軒家、星さんちに到着する。
「星はまだ帰っていないはず」
俺調べによれば星は毎日必ず四丁目のスーパーによるはずだから。
神宮は恐る恐る懐から手紙を取出し、ポストへとそれを近付ける。
「いや、まて……」
もし、この手紙を読んで星に逆に嫌われてしまったら。
『神宮って最低』
思いっきり軽蔑の表情を自分に向けてくる光子の顔を想像してしまい神宮は固まった。
「うぐっ」
なんということだ！想像しただけで泣きそうだ！！
すでに涙が出ています。
「どうする、俺」
やはりここは慎重にことを運ぶべきか！？だが、これ以上焦れったい思いをするのは耐えがたい。
これではストレスで勉強は疎か、せっかく手に入れたエースの座まで失いかねない。
しかし、仮に星にふられたら人生さえも終わりかねないのではなかろうか。
だったらここは友達からという選択も――――。
「あの」
「うわぁ」
突如声をかけられ喫驚する神宮。そのとき半分だけ入れていた手紙をポストに押し込んでしまった。
「うちになんかようなんか？」
学校から帰ってきた希卯が不振な動きをしていた神宮をジト目で睨む。
「なっなんでもありませ～ん！！」

神宮は一目散にその場から逃げていった。
「なんだあいつ」
希卯は首を傾げてその後ろ姿を見送った。
「ただいまぁ」
「うむ」
希卯が家に帰ると平午がいつものようにリビングで読書をしていた。
「なぁ今、変な奴が玄関にいてさぁ、ポストにこれ入れてったんだけど……」
「ん？変な奴だと。見せてみろ」
平午が神宮の手紙を受け取る。
「ほう。光子兄さま宛だな」
宛先を確認すると平午は慣れた手つきで手紙を開封しだす。
「おい。人の手紙勝手に開けていいのかよ」　戸惑いがちに問う希卯に、平午は当然のことをやっているまでだと言い放つ。
「ふん。これを入れた奴は不審者だったのだろう？ならば弟として光子兄さまをお守りする義務をまっとうするため、中を確認する必要があろうが」
「そんなもんかぁ」
平午の言い分に呆れつつも希卯も手紙に興味津々と覗き見る。中にはピンク色の便箋二枚と四葉のクローバーが入っていた。
「なになに――――」
平午は淡々と手紙の内容を声に出して読みだした。
「『星光子さまへ
拝啓　春暖の季節と相成り、樹木が芽吹き若やいだ頃となりました。つつがなくお過ごしのことと存じます。
突然、このような不躾な内容の手紙を一方的に送り付けるご無礼をお許しいただきたく存じます。
この度、星さまにご報告とお願いがあって筆をとった次第であります。

わたくし神宮紀人は、昨年の春、あなたさまをお見かけしたときより、心臓の高鳴を覚え激しい熱情にかられるようになりました。
それ以来、あなたさまの笑顔は、わたくしに人生の喜びを与えてくれるかけがえのないものとなっているのです。
つきましては、星さまにわたくしとの交際を申し込みたく存じ上げます。
もし、交際をご了承してくださるならば、今日、これからジンク町三丁目の公園へご足労いただければ幸いであります。
まことに身勝手なことを申し述べたこと、なにとぞお許しください。
あなたさまのますますのご健闘を、お祈り申し上げます。

敬具

神宮紀人

追伸　同封したクローバーは先日野原で発見したものです。お気に召していただければ幸いです。『だと」
「なんなんだぁ？いったい……」
手紙のあまりの形式張った内容と書道家然とした達筆さに、希卯は思いっきり眉を顰めた。
平午は顎に手を当て言う。
「ふむ。恐らく文章作成マニュアルなどに沿って書いたのだろう」
図星であった。神宮は散々文面に悩み倒した挙げ句、電子辞書の手紙作成機能を便りに清書したのだった。ちなみに彼は書道三段である。
「結局なにが言いてんだ？」
「これは光子兄さまあての恋文だ」
「恋文ぃ？これがラブレター―だってか！？」
果たして現代においてこれほど似付かわしくないラブレター―が存在するものなのか？
「てかさぁ、神宮紀人って男だろ？さっきこれ入れてた奴も男だったし」

「ああ。神宮紀人は光子兄さまのクラスメイトだ。強豪鉄高校の野球部でこの春からエースピッチャーに選ばれた将来有能な男。私の記憶では光子兄さまとそれほど親しい間柄ではなかったはずだが」
個人情報をスラスラ言って述べる平午。ありとあらゆる情報が、彼の小さな脳味噌に詰まっている。
「男が光子兄に告白ぅ？」
「ふっ愚かな」
怪訝そうに言う希卯を平午は鼻で笑い飛ばす。
「男が男に惚れるなどさして珍しいことではない。こと可憐な光子兄さまだ。今までなかったことの方が不思議なくらいだ」
「可憐ねぇ」
希卯には、いつものほほんとしている光子にそんな単語が似付かわしいかはなはだ疑問であった。
「現にお前のクラスの上条家の末の弟は不動尊寺の小せがれにぞっこんであるとの情報を得ているが？」
「隆盛かぁ。たしかにあいつはいつも大智の尻追っ掛け回してんなぁ」
希卯は人懐っこい顔して『大智！！大智！！』とうるさい友人の姿を思い出す。
「って、なんで平午がんなこと知ってんだ」
「ふん。この私がそんなおもしろそうな情報を手に入れそこなってると思うか？」
「おもしろそうな情報って……」
平午の辞書に他人のプライバシーという言葉はない。
「ともかく同性愛などさして問題ではない」
「まぁなぁ」
「それより問題なのは、この手紙が本当に恋文かどうかという点だ」
「というと？」
「こういう話を聞いたことあるか？」
平午はいつも以上に荘厳な面持ちで口を開く。

「イタリアンマフィアは暗殺する相手にまず贈り物をするという」
「なっなんですとぉ！！」
平午のいきなりの発言に希卯は驚き絶叫する。
「どういうこった？」
「つまり相手を油断させる罠だ。そもそもこの恋文の文章、きなくさいとは思わんか？」
「変だとは思うが」
「これは暗殺を予告する巧妙な暗号文とも受け取れる」
「まさかぁ」
「よく見ろ！！」
疑いの目を向ける希卯に平午は手紙を突き出す。
「ここだ。『心臓の高鳴を覚え激しい熱情にかられるようになりました』の部分。これは一見、ときめき胸踊っていると解釈もできるが、『憎しみの炎に焚き付けられ、心臓が高鳴っている』とも読み取れる」
「そうかぁ？」
「更にここだ！『あなたさまの笑顔は、わたくしに人生の喜びを与えてくれる』の部分」
「好きな奴の笑顔は嬉しいもんなんじゃねぇの？」
「甘いな。これは『お前の笑顔は、俺の憎しみの炎を絶やさずにしてくれる。憎しみこそ人生の原動力だ』そう言っているのではないのか！！」
「なるほど」
初めのうちは半信半疑だった希卯も、じょじょに平午の言い分に傾いてくる。
「つまり、この手紙を要約するとこうだ！！『お前を始めてみたときから憎くて憎くてたまらない！俺はお前のその笑顔を、絶望と屈辱に塗れさせることだけが生きがいだ！！ゆえにお前に決闘を申し込む。さっさとジンク三丁目の公園へ来やがれ！！豚野郎』とな」
「なにっ！決闘だと！！」

もはや希卯は完全に平午の言うことを信じ切っている。
「そういえば奴、金属バッドを持ってやがった！！」
神宮はただ部活を抜け出して手紙を持っていったので置いてくるのを忘れていただけである。
「それだ！！そいつはその金属バッドで光子兄さまの麗しいお顔を鮮血に染めようとしているにちがいない！」
「許せん！俺が返り討ちにしてやる！！」
希卯は怒りとともに立ち上がり、家を飛び出そうとする。
「待て、ぼう！！このことは私たちの心の内に秘め、光子兄さまに悟られぬよう内々に処理するのだぞ」
「なんでだよ」
「考えても見ろ。お優しい光子兄さまのことだ。クラスメイトがこんなにもご自分のことを憎んでいると知ってしまわれたら、どんなに深く傷つかれることか」
「そうか。そうだな。光子兄優しいもんな。わかった。俺の手で始末を付けてくるぜ！」
そう言って今度こそ希卯は家を飛び出たのだった。

ジンク三丁目の公園。
「……」
神宮は一心不乱にバッドを振っていた。こうでもしなければ落ち着いていられないからだ。
「星。そろそろ手紙読んでくれたかなぁ……ん？あれは———」
鬼の形相の希卯が近付いてくる。
「貴様が神宮紀人か！？」
圧し殺した声で訊ねる希卯。
「そっそうだけど」
なんだぁ？おっかねぇ！
「きみは星くんちの———」

「そうだ！！愉快な星さんちの次男坊、切り込み隊長こと星希卯だ！！」
「星くんの弟さん……」
なんだよ切り込み隊長って！？
パニくる神宮。そんな彼を無視して希卯は叫ぶ。
「よくも、光子兄に決闘を申し込んでくれたな！？」
「はぁ？決闘！？」
「残念だが、光子兄と戦いたかったらまずはこの俺を倒すことだ！！」
「戦うってなんのこと！？」
神宮は希卯の迫力に負けすっかり狼狽仕切る。
「問答無用！！俺の拳が怒りで唸る、悪を砕けと轟き咆える！必殺っシュ―ティングスター―パァンチ！！」
「ひでぶ」
星さんち最強の拳が神宮の顔面に炸裂し、彼は木の葉のように舞い上がって昏倒した。
「ふん！これにこりたら二度と光子兄に手を出すな！！わかったか！？」
構えて忠告する希卯。
「……」
しかし、意味もわからず目を回している神宮の耳に届くことはなかった。

一方その頃光子は、
「ただいまぁ」
いつものように買物袋を下げて帰宅した。
「お帰りなさいませ、光子兄さま」
平午はいつものように読書をしながら挨拶した。
「あれ？ぼう、まだ帰ってないの？」

「あいつなら、今し方ロードワークにでかけました」
「ふーん。あっ今日はハンバーグだからね」　そう言って光子は台所へ向かった。
「……」
平午は読書をしながら思う。
これで光子兄さまを狙う悪い虫を排除することができた。
「やはりバカは掌で踊らせるに限る」
「ん？なんか言った」
「いいえ。ハンバーグ嬉しいなと」
平午は愛らしいとびきりの笑みで応じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1899h/

星さんちの

2010年10月8日15時07分発行